

「概観的な時代」の「終末観」と 「民族的憤激」

——三島由紀夫における原爆表象——

柳瀬 善治

「はじめに」

三島が原爆について触れた文章は少ない。しかしそれらを拾つていくと、その時点での三島の世界認識が織り込まれており、その変遷がそれ自体三島の政治意識の変化に呼応していることがわかる。本稿では、初出や同時代の動向、三島の他の政治論文や芸術論にも眼を配りながら、三島の原爆表象を見ていきたいと思う。

1 「小説家の休暇」——「概観的な時代」の精神と芸術——

三島は『小説家の休暇』に収められた昭和30（1955）年7月19日の日記で、「ジュネーブでの四巨頭会談」とビキニでの水爆実験に触れている。

「我々は、『知的』な、概観的な時代に生きてゐる。」「もしその上、われわれが巨人の感受性にめぐまれてゐたら、水素爆弾の実験も線香花火のごときものであらう。例のビキニの実験における

る補償問題でも感じたことであるが、その実験を非人間的といひ、反人道的といふときに、われわれの人間なる概念は、すでに動搖をきたしてゐる。私は政治的偏見なしにいふのであるが、水爆の実験をした國の人間が、被害國の人間に保証を提供するといふこの行為には、國際間の問題とか、人種的偏見の問題とかを超えて、人間の或る機能が、人間の別の機能に対し、慈悲を垂れてゐるといふ感を与へる。」「たとへばわれわれは、水爆を企画する精神と無縁ではない。われわれが文明の利便として電気洗濯機を利用することと、水爆を設計した精神とは無縁ではない。」「現代の人間概念には、おそるべきアンバランスが起つてゐる。広島の原爆の被災者におけるよりも、あの原爆を投下した人間に、かうしたアンバランスはもつと強烈に意識されたはずであつた。被災者は火と閃光と死を見た。それを知的に概観的に理解する暇はなかつた。（略）しかし原爆投下者はどうだつたか？（略）おそらくばくの技術と科学知識にめぐまれてゐた投下者は、巨大なざる自分の感受性を、あの知的な外観的な世界像の下に押しつぶすことを知つてゐたのである。そしてかういふ小さな隠蔽、小さな抑圧が、十分のあの酸鼻な結果をもたらすに足りた。ところがこうした投下者の意識は、今日われわれの生活のどの片隅にも侵入してゐて、それが気づかれないのは、習慣になつたからにすぎないのである。あるひは小さな政治問題にひそむ世界的な連関に触れたり、國際連合を論じ世界國家を夢想したりするときのみならず、ほんの日常の判断を下すときにも、知的な外観的な世界像と、人間の肉体的制約とのアンバランスに直面して、一瞬、目をつぶつて、「小さな隠蔽」、「小さな抑圧」を犯すことに慣れてしまつ

た。」「かくて例の水爆実験の補償は、私の脳裏で不思議な図式を以て、浮かんで来ざるを得ない。いづれも人間の領域でありながら、一方には、水爆、宇宙旅行、国際連合を含めた知的概観的世界像があり、一方には肉体的制約に包まれた人間の、白血球の減少があり、日常生活の生活問題があり、家族があり、労働があるのだ。この二つのものをつなぐ橋が経済学だけで解決されやうとは思はれぬ。この二つのものは、現代に住む人間の条件であり（略）」「精神はどこに位置するのか、とわれわれは改めて首をかしげる。巨人的な精神とは、一個の有機体であつて、こんなものを容れる隙が世界にはなくなつた。さういふものが人間と称されていたのに、人間概念は崩壊したのである。人間愛はかくて侮蔑的なものになつた。なぜならそれは、人間が人間を愛することではなくて、誰も信じなくなつた人間概念を信じてゐるやうなふりをすることであり、ひいては人間の自己蔑視に他ならなくなつたからである。」「一方では、通信交通の発達から、精神のゆつくりとした統一と総合の作用は追ひ抜かれ、哲学の使命である世界把握は、普遍的な概念的世界像によつて追ひ抜かれた。」という一文はそうした理解を支えるものであろう。しかし、そこに投下者と被災者の意識のアンバランスの問題⁽¹⁾がさりげなく触れられている。「広島の原爆の被災者におけるよりも、あの原爆を投下した人間に、かうしたアンバランスはもつと強烈に意識されたはずであつた。」「おそらくいくばくの技術と科学知識にめぐまれてゐた投下者は、巨大ならざる自分の感受性を、あの知的な外観的な世界像の下に押しつぶすことを知つてゐたのである。」さらにはそこで「人間なる概念」の「動搖」、つまり原爆の前ではヒューマニズムの意識が機能不全を起こすこと⁽²⁾も付け加えられている。「さういふものが人間と称されていたのに、人間概念は崩壊したのである。人間愛はかくて侮蔑的なものになつた。なぜならそれは、人間が人間を愛することではなくて、誰も信じなくなつた人間概念を信じてゐるやうなふりをすることであり、ひいては人間の自己蔑視に他ならなくなつたからである。」この認識はその後、〈宇宙人の視座から見た世界〉という『美しい星』へとつながつていくだろう。そして最後に芸術の使命が「どんな恐ろしい身の毛のよだつやうな領域へも、子供じみた好奇心で、命ぜられたままに踏み込んでゆく」と述べられていることも、領域へも、子供じみた好奇心で、命ぜられたままに踏み込んでゆく。

くにちがひない。」（『小説家の休暇』　『決定版三島由紀夫全集』第28巻 p.910～914）

これは情報化社会における人間の意識の変化を常識的な範囲で述べたに過ぎない一文のように思える。「一方では、通信交通の発達から、精神のゆつくりとした統一と総合の作用は追ひ抜かれ、哲学の使命である世界把握は、普遍的な概念的世界像によつて追ひ抜かれた。」といふものは、そのうした理解を支えるものであろう。しかし、そこに投下者と被災者の意識のアンバランスの問題⁽¹⁾がさりげなく触れられている。「広島の原爆の被災者におけるよりも、あの原爆を投下した人間に、かうしたアンバランスはもつと強烈に意識されたはずであつた。」「おそらくいくばくの技術と科学知識にめぐまれてゐた投下者は、巨大ならざる自分の感受性を、あの知的な外観的な世界像の下に押しつぶすことを知つてゐたのである。」さらにはそこで「人間なる概念」の「動搖」、つまり原爆の前ではヒューマニズムの意識が機能不全を起こすこと⁽²⁾も付け加えられている。「さういふものが人間と称されていたのに、人間概念は崩壊したのである。人間愛はかくて侮蔑的なものになつた。なぜならそれは、人間が人間を愛することではなくて、誰も信じなくなつた人間概念を信じてゐるやうなふりをすることであり、ひいては人間の自己蔑視に他ならなくなつたからである。」この認識はその後、〈宇宙人の視座から見た世界〉という『美しい星』へとつながつていくだろう。そして最後に芸術の使命が「どんな恐ろしい身の毛のよだつやうな領域へも、子供じみた好奇心で、命ぜられたままに踏み込んでゆく」と述べられていることも、『太陽と鉄』の行論と三島のその後を考えたとき、暗示的である。

2 「終末觀と文學」—「世界像」の変貌と文學の危機—

昭和37(1962)年の正月には「終末觀と文學」(初出『毎日新聞』1962年1月4日『決定版三島由紀夫全集』32巻)という短いエッセイで水爆実験の問題に触れている。ここでは「科学が世界終末を保障する」「稀有の時代」とされ、「今日、交通通信の発達による世界像の最終的拡大は、つひに地球の表面積と正確に一致し、それは必然的に、全世界を終末に導く破壊力を発明させずにはおかない。かくて水爆弾頭の大陸間誘導弾と、国際連合の思想とは、表裏一体になつてゐるともいへる。」それは「破滅に裏付けられた連帶感」であり、「概括的、概念的な世界認識の裏側には必ず水素爆弾がくすぶつてゐるのである」とする。「なぜなら、ある人間が頭の中で、地球儀のような、一望の下に見渡せる図式的な世界像を即座に描き出せるといふこと、どんな凡庸な人間にもそれが可能だといふことは、ゾッとするやうなものがあるからだ。」この種の世界認識は、あたかも原爆を載せた飛行機に乗つた軍人が、機上から見下ろした一枚の地図のやうな広島市の景色に似てゐて、そこに原爆を落つことすことは、まるで大したこととも思はれぬからだ。」「さて、文学はいつも終末觀の味方である。この説明はまことに簡単で、文学の意図するところは、いつの時代にも、ことばによる世界解釈・世界認識にほかならず、その時代時代の宗教や哲学の終末觀は、このための格好な見取り図を提供してくれたからである。末世とは小説の終章であり、小説家の脳裏に最初に浮かんではならぬものだ。終はりのはうから世

界を見通すこと、これが各時代の末世思想の思考の技術だつた。世界がやがて終はるといふ考え方ほど、文学的創造にとつても、文學の記録的機能にとつてもこころを鼓舞してくれる考へはなかつた。」「しかし、こんどはどうやら事情が違ふらしい。文学ははじめて、何らその味方になりえぬやうな、終末觀、科学的な一般的抽象的な終末觀にぶつかつたのである。水爆戦争をそのカタストローフとする終末觀は、あの概括的概観的なメカニックな世界認識を前提としてをり、もし文学がこのやうな世界認識を受け入れたら、その瞬間に文学は崩壊してしまふ。しかし、もし文学がこんな終末觀に反対して、「美しい者が永久にここに止まる」といふ主張をはじめたとしたら、それもまた自縛自縛なりはせぬだらうか。それでは文学の存在理由がなくなつてしまひ、彼はただ背理と絵空事の証人にすぎなくなるだらう。」「以上は、また同時に、今日の小説の問題でもある。いはゆるいきいきとした具体性、かつて小説家の手の内で羽ばたいてゐた生活の具体性は、今日の終末觀を宿さない限り、路傍の石ころのやうな、世界から見離された、孤立した具体性に変貌してしまつた。しかも彼が、現代の終末觀を投影しようと試みると、すべての具体性は死に絶え、冷たい概観的な図式的な世界認識が彼に襲い掛かるのだ。」「(終末觀と文學) 初出『毎日新聞』1962年1月4日『決定版三島由紀夫全集』32巻p.19~22

三島は「交通通信の発達による世界像の最終的拡大は、つひに地球の表面積と正確に一致し、それは必然的に、全世界を終末に導く破壊力を発明させずにはおかない。かくて水爆弾頭の大陸間誘導弾と、国際連合の思想とは、表裏一体になつてゐる」、「破滅

に裏付けられた連帶感」であり、「概括的、概念的な世界認識の

裏側には必ず水素爆弾がくすぶつてゐるのである」とする。この理解は先に見た『小説家の休暇』での認識の延長線上にあると言えるだろう。「ある人間が頭の中で、地球儀のような、一望の下に見渡せる図式的な世界像を即座に描き出せるといふこと、どんな凡庸な人間にもそれが可能」であり、「この種の世界認識は、

あたかも原爆を載せた飛行機に乗った軍人が、機上から見下ろした一枚の地図のやうな広島市の景色に似てゐる」ということ、つまりそれは単なる世界像の変貌を意味するだけでなく、いまやそうした世界像が万人に与えられており、「かうした投下者の意識は、今日われわれの生活のどの片隅にも侵入してゐて、それが気づかれないのは、習慣になつたからにすぎないのである」ことに、三島は「ゾッとするやうなもの」を感じ取つてゐる。そこでは終末的な世界認識は、小説家の特権ではなくなつてゐる。「末世とは小説の終章であり、小説家の脳裏に最初に浮かんでゐなくてはならぬもの」という三島の前提が、「概括的、概念的な世界認識」の元では崩れてしまうからだ。

さらに、いわゆる原爆文学が、投下された側からその「阿鼻叫喚の地獄」を表象しようとしているのに対し、三島は投下する側の世界認識を、「今日の小説の問題」、現代文学の条件として考へている。しかも「概括的概観的なメカニックな世界認識を前提として」いる「水爆戦争をそのカタストローフとする終末観」を、三島は、それを受け入れたら、「すべての具体性は死に絶え」「文學が崩壊」してしまい、かといって受け入れなければ「路傍の石ころのやうな、世界から見離された、孤立した具体性に変貌してしま

しま」うような「背理」としてとらえている。
このエッセイが発表されたのは 1962 年の 1 月 4 日だが、まさにその年の 1 月から『美しい星』が書かれはじめている（12 月まで『新潮』に連載）のは、興味深いところである。

3 『美しい星』

—「概観的な世界認識」と「肉体的制約」の二重の表象—

三島が核時代の意識をあつかった作品としては言わずと知れた『美しい星』がある。奥野健男の論が口火となつた「政治と文学論争」⁽³⁾の発端ともなつた作品だが、この作品には多くの先行論がある。この作品の時間意識に着目し、『鏡子の家』などの他作品との対応を論じた三浦雅士「距離の変容」⁽⁴⁾、ユングの諸論との対応を論じた矢吹省二「ある悲劇の分析—三島由紀夫『美しい星』考」⁽⁵⁾、聖書などの宗教性とのかかわりを論じつさらには作品の「破綻」の創造性を指摘した及川俊哉⁽⁶⁾、「三島由紀夫『美しい星』論—物語類型における聖書との関連について—」、同「美しい星」論解の仮案—破綻の証明とその積極的評価—、「二重化のナラティヴ」という概念で『美しい星』の語りを当時の政治と文学論争にも目を配りつつ分析した山崎義光⁽⁷⁾「二重化のナラティヴ—三島由紀夫『美しい星』と一九六〇年代の状況論—」、論争部分を重視する従来の読みに対し、竹宮の「二重透視」の美学に注目し、それが「芸術的創造行為」である種「宇宙人の存在の謎解き」になつてゐるとした点に特色がある有元伸子⁽⁸⁾「美しい星」論—二重透視の美学—」がある。

『美しい星』の表象のあり方、いわば「ナラティヴの構造」について、山崎義光は次のように述べている。

『美しい星』は、物語世界に人物として登場することのない物語世界外に位置する語りの座から物語られるが、第三者的な地位からの介入はおさえられ、登場人物を不定的に焦点化し、使命を持った宇宙人であるという確信にいたった人物たちの思考をなぞるようにして呈示される。それによって、登場人物たちの意味の欠如感とともに、突如あらわれた啓示としてUFO出現の経緯が語られる。しかしながら、他方で、戯画的な形象化や、脇役的人物の視座を用意すること等によって、アイロニックに地球人に過ぎないことが含意される。それゆえ、物語られている登場人物の視点と、それを受け取る読み手の視点とで、二重化された異なる意味を派生する物語の叙法（ナラティヴ）が採られている。超越的な次元から明示的には物語られることのないこのような叙法は、世界を鳥瞰的な第三者の立場から意味づける視座がなく、おののの視点に相対的な優劣しかりえないことを前景化する。そして、そのことの逆説的な効果として、みずからの視点こそが全体を鳥瞰する特権的な視点であると主張された場合に、それに対して、絶対的に超越的な批判を加えることが不可能であるという事態を顕在化させることになる。⁽⁹⁾

興味深いのは、山崎がまとめた「二重化のナラティヴ」と『小説家の休暇』「終末観と文学」での「知的な概観的な時代」における「終末観」の表象不可能性という世界認識とが、対応関係にあることである。「知的な概観的な時代」には「世界を鳥瞰的な第三者の立場から意味づける視座がなく」「おそるべきアンバラ

ンス」がおこつてゐる。無論、そこでは原爆の投下者ですら「全體を鳥瞰する特権的な視点」でないことが含意されている。「世界を鳥瞰的な第三者の立場から意味づける視座がなく、おののの視点に相対的な優劣しかりえない」状況とは「二つの有機体である」「巨人的な精神」が失われ、そこでは「それは、人間が人間を愛することではなくて、誰も信じなくなつた人間概念を信じてゐるやうなふりをする」しかなくなる。

こうした状況下での「登場人物たちの意味の欠如感」はそのまま、「路傍の石ころのやうな、世界から見離された、孤立した具体性になった」状態であり、かといってそれに「概括的概観的なメカニックな世界認識」すなわち、作中の羽黒たちと大杉一家がともに共に有している「核戦争で世界が滅び、それを宇宙人である自分たちだけが知つてゐる」という認識を投影すると逆に「すべての具体性は死に絶え」てしまう。こうした人間概念が崩壊したなかで、「みずからの視点こそが全体を鳥瞰する特権的な視点であると主張」する形象を提出するためには、その存在は「人間」でないもの、すなわち「宇宙人」として表象され、しかもそれを肯定的に表象することは、「概括的概観的なメカニックな世界認識を前提として」いる「水爆戦争をそのカタストローフとする終末観」を受け入れるのと同じことであるため、その表象は絶えず、「戯画的な形象化」によって相対化されるしかいだらう。

つまり論争の場面で語られた発話の内容だけでなく、作品のナラティヴ自体が、三島の核時代の世界認識を表象するものとなつており、山崎のいう「二重化のナラティヴ」を採用することで、「概括的概観的なメカニックな世界認識」を受け入れた状態と受

け入れず「路傍の石ころのやうな、世界から見離された、孤立した具体性になつた」状態とをともに描き出すことができるのである。

具体的な小説の文章に即してみると、小説の冒頭部分の、苦悩する大杉重一郎の記述は、「精神のゆつくりとした統一と総合の作用は追ひ抜かれ、哲学の使命である世界把握は、普遍的な概念的世界像によつて追ひ抜かれた」状況下で、「ほんの日常の判断を下すときにも」見られる、「知的な外観的な世界像と、人間の肉体的制約とのアンバランス」苦しむさまが描かれており、そ

の「人間の肉体的制約とのアンバランス」が、原爆投下者の視点「ある人が頭の中で、地球儀のような、一望の下に見渡せる図式的な世界像を即座に描き出せる」—にもつとも象徴的に現れること、またそれが「何の努力もなく、何の実績もない」「無為の男」である重一郎にある日突然何の根拠もない「恩寵のようないい感」（『決定版三島由紀夫全集』第10巻『美しい星』p.17）として現れることに、ともにはつきり示されている。

「重一郎はこの世界に完全に統一感の欠けてゐることを見抜いてゐた。すべては恐ろしいほどばらばらだつた。」（『決定版三島由紀夫全集』第10巻『美しい星』p.19）

「この同じ地上に住む以上、すつかり統一感を失つた世界とはいへ、彼はやはりあらゆる犯罪、あらゆる不祥事に対し、無答責であるとは云へないので。」「どうしてあの原子爆弾ですら、個人的な苦痛に還元され、肉体的な体験、だけで頒たれることになつたのだらう。あの原爆投下者の発狂の原因は、彼にはありありとわかるやうな気がした。」（p.20）

こうしたなかでは、「人間概念は崩壊」するしかなく、「核実験反対会議の委員」（p.172）との対話の場面で書かれる「人間主義」といふ言葉がてきめんに人間を怒らせる有様」（p.173）は、まさに、「人間概念は崩壊した」状況が、ほかならぬ核実験反対の（人類愛に満ちた！）人々の間にすら、入り込んでしまうことを如実に示していると言える。

4 「私の中のヒロシマ」—「民族的憤激」とイメージの外部—

しかし、『美しい星』の段階では作品内での相対化がなされた原爆の表象が、その後三島が政治的に急進化した後のエッセイでは、直截に民族と結び付けられることになる。それが「私の中のヒロシマ 民族的憤激を思ひ起せ」である。

「私の中のヒロシマ」は初出誌が『週刊朝日』1967年8月11日号であり、もともと5人の識者の発言として70人の著名人アンケートとともに掲載されたものである。三島以外の4人は国際政治学者の坂本義和、当時自民党幹事長の福田赳夫、総評の議長、だつた太田薰、女優の日色ともゑ。坂本は核拡散の可能性を指摘した上で、それをコントロールし、防止する役割を日本が担うべきだと主張し、福田は8月6日の大蔵省官房文書課長時代の記憶を述べた後、あえて比較の道を進むべきだと語り、大田は山口で技術として勤めていた当時に被爆者が非難してきたときの記憶を語つた後、技術者として受けた衝撃—「いつたん発明された科学技術は抹殺されたことがない」—が、自分を反米の道に進ませたとし、原水禁運動の分裂を憂いでいる。日色は小学生のときに見た

映画「原爆の子」の衝撃から、ヒロシマへの関心が始まつたと語っている。

アンケートは「1 将来、地球上のどこかで第二のヒロシマは起る可能性はありますか。あるとすればどこででしょうか。2 第二のヒロシマを防止するのに日本が取りうる有効な方法がありますか。3 原爆について小説、詩、手記、映画、演劇などが数多く発表されています。そのなかで感銘を受けたものがありましたら、一つだけあげてください。」の内容で、そして久野収が「アンケートを読んで」という一文を書いている。

アンケートに答えている人物は多岐にわたり、作家の石川淳・江藤淳・小田実、中村草田男、山岡荘八、田中角栄や竹内義勝、宮本顯治のような政治家、当時の国鉄総裁や日銀頭取、NHK社長やBBS社長、創価学会会長の池田大作や「生長の家」の谷口雅春もアンケートにこたえている。大学関係者では当時の東大総長の大河内一男、社会党顧問の向坂逸郎、岐阜大総長だった今西錦司といつた顔ぶれが時代を感じさせる。芸能スポーツ関係者に対しても行われており、岩下志麻、立川談志、中村八大、黛敏郎、山本リンダ、土井正博、渡辺美佐などが答えている。

70人中34人が「第二のヒロシマ」があると答えており、アジア地域を挙げている人が多い。具体的には「中共」（江崎真澄）、社会党や共産党の関係者では「アメリカ帝国主義」と結びつけて「ベトナム」と答えている人が多い（宮本顯治、社会党書記長成田知己、社会党議員田中寿美子など）。起こらないと答えた人も「ないと信じたい」（前川国男）「ないとはいえない」（今西錦司）「あると思いたくありませんが」（沢田隆治）というやや悲観的な答えも目に

つく。原爆文学については、井伏の『黒い雨』（池田大作、前田義徳、伏見康治、円地文子、江藤淳、江田三郎、三宅泰雄、東郷青児、大江の『ヒロシマ・ノート』（中村草田男、江崎真澄）、永井隆の『長崎の鐘』『この子を残して』（剣木享弘、永野重雄）「原爆の子」（映画と書籍両方を含む）（沢田隆治、梅根悟、坂田昌一、宮本高明）、崎三吉『原爆詩集』（宮本顯治）、大田洋子の作品（沢田隆治）などが挙がっている。土門拳の「ヒロシマ」（ヨットマンの鹿島郁夫）、丸木位里・俊の「原爆の図」（末川博）、ボーランドの作曲家ベンデレツキーの作品「広島の原爆犠牲者に捧げるエレジー」（黛敏郎）を挙げた人もいた。また、原爆文学というコンセプト自体に疑問を呈していると取れる発言も多い。「一つだけでは「ヒロシマ」は描き出されない」（小田実）「概していい加減な人間の想像で、感銘をよぶに値しない」（小汀利得）「毎年行く原爆病院の患者の切実な訴え以上の作品はない」（成田知己）。またアンケート自体をあまり積極的に受け取っていない人物もあり、たとえば、立川談志はすべての項目に「ないでしよう」と答えている。さらには同じ号には幾人かが言及していた「原爆の図」の丸木俊と「原爆の子」の新藤兼人の対談が掲載されている。

この初出誌が60年代後半の『週刊朝日』である性質上、全体的に核武装批判の方向に議論が傾くのは当然とも言えるが、三島がほのめかしている核武装容認論や原子力への肯定的アプローチは決して当時皆無だったわけではなく、三島の蔵書の中にも入っている『国民講座 核時代と日本の核政策』（原書房 1968・5）には、日本の「核アレルギー」を批判した春日井邦夫の論文「核アレルギー」の形成過程」や関野英夫「原子力の軍事利用」、曾

村安信「核時代と日本の方向」、中村菊男の「核武装政策と日本」などが収められている。春日井の論文は、正確には核武装容認論ではなく、ビキニ実験以来の日本人の「核アレルギー」が、原水協などの政治運動とも連動して原子力発電などの「平和利用」まで抑圧する結果になったと批判的に述べたものである。(「進歩的学者」「日共」への揶揄的な論調など、春日井の論には左翼系の政治理論への嫌悪感がはつきりと読み取れる。ただ、春日井は第二次大戦中の「二号研究と呼ばれたウラン爆弾の研究」(p.128)にふれており、「数年までは、憎い米国を撃つために、原爆研究を進めた日本人の態度など、どうの昔に道徳的に清算したような気持で、一方的に米国への反感と原爆への恐怖感にのみとらえられる状況が形成されていたのである。」(p.129)という指摘は今でも顧みる必要があるだろう。)

中村の論調はただ単に核武装せよと主張しているわけではなく、核武装容認論と反対論のそれぞれの論拠を検討したうえで、安保体制も含めた「日本の安全保障を確実ならしむる」(p.87)ために原子力の平和利用も含めた「建設的意見」(p.88)をしなければならないと主張しているのだが、しかし彼のスタンスはこの一行に明らかであろう。「しかしながら、日本として、いたづらにセンチメンタルな左翼勢力の宣伝に惑わされて、戦争抑止としての核兵器の存在と、原子力の将来の産業界に演ずる役割を過小評価するようなことがあつてはなるまい」(p.87)（中村は慶應大的政治学者で丸山真男を批判した『日本ファシズム論』や『日米安保肯定論』などの著書があり、三島は対談の中で丸山批判の例として引いている⁽¹⁰⁾。）

「私の中のヒロシマ」(『週刊朝日』1967・8)の中で、三島は概略次のようなことを述べている。

「第一に、原爆に関しては、体験した者と体験しない者、被爆者と被爆しなかつたものという2つの立場以外、絶対ありえないからだ。」「第二に、剣は、私のイメージの中にある。その向こうの銃も、さらにおぼろげながらもう一つ向こうの機関銃も。だが、核兵器となるとこれはもうイメージの外である。」

ここで三島は自らのイメージ能力の外部に原爆を置いている。

三島は、直接体験していないため(イメージ能力を超えていたため)、自分は文学の中に原爆を描くことはしないと断つている。原爆が新型爆弾であると聞いた時、三島は「世界の終りだと思った。この世界終末観はその後の私の文学の唯一の母体を成すものである。」「原爆に対する日本人の民族的憤激を正当に表現した文字は、終戦の詔勅の「五内為二裂ク」といふ一節以外に私は知らない。」「そのかはり、日本人は八月十五日を転機に最大の屈辱を最大の誇りに切りかへるといふ奇妙な転換をやつてのけた。」⁽¹¹⁾。こののち、三島は「彼らは言ひわけなしに、それを作ることができない。良心の呵責なしに作りうるのは、唯一の被爆国・日本以外にない。我々は新しい核時代に、輝かしい特権をもつて対処すべきではないのか。そのための新しい政治的論理を確立すべきではないのか。日本人は、ここで民族的憤激を思ひ起すべきではないのか。」⁽¹²⁾と述べている。「我々は新しい核時代に、輝かしい特権をもつて対処すべきではないのか。そのための新しい政治的論理を確立すべきではないのか。」このロジックは近年ポスト日米安保をにらんで政界と保守論壇で浮上している核武装容認のロジック

のいわば雛形をなすものである。

そして、「原爆に対する日本人の民族的憤激を正当に表現した文字は、終戦の詔勅の「五内為二裂ク」といふ一節以外に、私は知らない。」、これはいわば最初の〈原爆文学〉をことわるうに玉音放送に見る驚愕すべき視角⁽¹³⁾である。先に見た同じ号の『週刊朝日』に載つた他のアンケートでの原爆文学の回答とは完全にかけ離れた発想であり、三島はおそらく意識的にこうした回答をしていると思われる。「世界の終りだと思った。この世界終末観はその後の私の文学の唯一の母体を成すものである。」という一句は、先に見た2つのエッセイの中でも繰り返し使われてきた論理と同じである。

「民族的憤激」を経由して三島が、天皇（終戦詔勅）と原爆を接続している点については、これに先立ついくつかの例が存在する。原爆と終戦詔勅を接続させた例としては、火野葦平「世界に只一つの記録」『記録写真原爆の長崎』（1959 学風出版）「原子雲の下より」の崎三吉の序文（1952）、崎三吉の詩「すべての声は訴える」（広島文学資料保全の会編『行李の中から出てきた原爆の詩』1950 暮しの手帳社）、アサヒグラフの「特集原爆被害初公開」（1952年8月6日号）などがある。これらの言説では「敵ハ新タニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻リニ無辜ヲ殺傷シ」が援用されているのに對し、三島は「五内為二裂ク」を引いている⁽¹⁴⁾。内田隆三は『国士論』のなかで、超越性の審級が敗戦を境に三種の神器が表象する天皇から原爆が表象する「神秘的な超越性」へと「転移」したと述べている⁽¹⁵⁾が、三島においてはこの両者が癒着している。原爆を投下した側に焦点化して、その残虐性（そして投下された「無

辜」の側の悲惨さ）を浮き上がりさせるために終戦詔勅の一節を使用する（しかしそこで詔勅が召還されるということはそこに「敗戦国」の国民的「一体感」が感受されていることも事実だらう）他の言説に対し、三島は投下に触発された「怒り」をいわば身体化するためには「五内為二裂ク」の一節をひき、「民族的憤激」として表象しているわけである。〈触発された怒り〉というのが重要で、三島は落とされた被爆者自身については語ろうとしていない。被爆者はあくまでも三島のイメージ能力の外部にあり、他者はそれを「触発された怒り」さらにはそこから触発された「世界終末観」としてしか感じ取れない。そして投下する側の感性にも、これまで見たような「概括的・概念的な世界認識」につながるものだと考へ、それに立ち入ろうとしない。これまで語ってきた自らの原爆に關するポリシーを明確に踏まえたうえで、掲載されるメディアの質をも考へて、意図的に確信犯的な発言がなされているのである。

5 三島の政治的発言とその文脈——「空気を読む」三島由紀夫——

では、三島のこの突出した（と見える）発言は同時代の文脈の中ではどのように映るのであろうか。「私の中のヒロシマ」については、既に見たので、ほかの論文の初出を例にとつて見てみよう。

三島にとつての政治的集団論である「同志の心情と非情」が『潮』の1970年1月号に掲載されている。この論については、先の拙稿で論じた⁽¹⁶⁾が、概略次のような主張がなされる。三島は

まず「心情的なものから出発しながら、共同体の要求する非情を、いかにしてその心情が容認するか」（『決定版三島由紀夫全集』第36巻 p.15）という問い合わせたて、「一つの政治的行動は、その戦術面において、つねに心情と非情とに引き裂かされること」（p.16）「私は政治行動においてもことばのやうな、あるひはことばに匹敵するやうな厳密なものが、内側と外側との断絶を乗りこえるたゞ一つの橋になるべきだと思ふ。」（p.17）とし、資本主義社会では金はそうした純粹に公共的性格を持ち得ないことを指摘した上で、「同志的結合」を「彼は自分の知らない他人であると、法廷できへ証言できること」（p.18）として、拷問に耐えるという意味で黙秘権を死につなげることを主張する。

このときの『潮』は「同志愛」の特集を組んでおり、三島の論文の後に「名作に見る同志の人々」という巣谷大四、尾崎秀樹、紀田順一郎、小松左京による座談会を掲載している。歴史的に日本近代文学を「同志愛」という観点から検討したものでマルクスの同志の定義——人々の生産関係が共通であつてそれを高めて文化的に、生活的に向上していく、その同じ目的をもつてやるのが同志（同特集 p.100）——から始まり、ドストエフスキイの革命家の記述のタイプなどを検討したのち、近代文学のさまざまな作品を検討している。そこで例として挙がっているのは荒畠寒村『光を掲ぐる者』、山本有三『同志の人々』、東海散士の『佳人の奇遇』などであり、三島の『奔馬』もまた例として挙げられている。政治小説や記録文学を同志愛という観点から再検討しており、さらにプロレタリア文学も同志愛を意識した文学（p.105）としてとらえている（貴司山治『同志愛』など）また当時流行っていた『巨

人の星』も「立派な同志愛マンガ」（p.107）ととらえられている。この試みは文学史再検討の面から見ても興味深いものであるといえよう。なお『潮』はこれに先立つ 1969 年 11 月に高橋和巳との対談「大いなる過渡期の論理」を掲載しており、高橋の死後 1972 年 7 月号にその対話を再度掲載した上で、どのようにしてこれが実現したか——多忙な三島とすでに病を得ていた高橋のスケジュール調整が大変だったこと、三島が高橋の健康を気にかけていたこと、三島の没後、高橋が「対談を引き受けよかつた」と語つしたこと——を編集部のコメントとして載せている。

さらに拙稿で論じた⁽¹⁷⁾ もうひとつ論「革命の哲学としての陽明学」は『諸君』の 1970 年 9 月号に掲載されており、三島が同年 11 月 25 日の決起に向けて準備を進めていた時期にあたる「革命哲学としての陽明学」⁽¹⁸⁾では、革命理論にはその楽天主義を裏側から補完するニヒリズムがある（例えばフランス革命におけるルソーとサド）——という前提から、現在の革命哲学としての陽明学を次のように説明する。「同一化とは、自分の中の空虚を巨人の中の空虚と同一視することであり、自分の得たニヒリズムをもつと巨大なニヒリズムと同一化することである。」（『決定版三島由紀夫全集』第36巻 p.30）「かうして陽明学の行動的な側面があらはになるのは、結局、太虚をテコにして認識から行動に跳躍するその段階である。」陽明学は良知が到達した果ての太虚、言い換えればニヒリズムをテコにして、そこから能動性のジャンプを使つてしやにむに行動に帰つてくるための帰りの道でもあるともいへよう。（p.303）。ニヒリズムから能動的な行為への「ジャンプ」を引き出すための論理を提出しようとした論だが、そこには性急さ

が目立ち、十全な革命論を展開できているとは言い難い。

このときの『諸君』は総特集「アンボは終わった、しかし」を組んでおり、神谷不二や秦野章の論文が掲載されている。

こうしてみると、単独に取り出せば三島の急進化した政治的発言と捉えられるものも、その初出に当たつてみると、(注文原稿としての色合い)が濃く、なおかつその中で媒体と注文内容を意識して(空気を読んだ上で)他の論者が答えると予測されることとは対照的な内容を答えていることがわかる。革新系の視座から反核の論が並ぶと予測される『週刊朝日』には民族的憤激に基づく核武装容認論、創価学会系のオピニオン誌である『潮』には政治的連帯と同志論、保守系の『諸君』には革命哲学といった具合である。つまり決してバランスを完全に失っていたわけではなく、これは三島なりのメディア戦略だったといえよう。

6 「ポストヴィエトナム」時代の(文化)防衛論と核戦略

三島の対談・講演での原爆に関する発言を拾つてみると、1968年10月3日の早稲田大学でのティーチイン「国家革新の原理」(初出『文化防衛論』1969・4)で三島は核の問題について次のように語っている。

「自主防衛論」で核の問題が入つてくると非常に問題が厄介になります。自分のクニを自分の力で守るために核がなければ守れないことは今の戦略上はつきりわかっているのです。ただ核には二種類あります。国の威信を保ち、世界の核戦略体制に伍していくためには、戦略核というものを、ストラジックヌークリア

ー・ウイーポンも持たなければならない。このためには大変な金がかかりますから、この金のために経済構造ががたがたになつちやつて(略)

「もうひとつ、核というものの欠点は国の中で使えないのですね、核兵器というものは」「しかもこれから戦争には直接侵略ばかりじゃない。さつき申し上げたような間接侵略的な形の戦争が多いわけですから、それに対し核は使えないということになりますと、それじゃ局所核ならば安上がりだし、使えばいいじゃないか。なるほど、そんなんで、例えば今に核兵器が進歩しますと、核ピストル持つた強盗が銀行へ入るかもしれない。こんな時代は私はすぐ目の前に来ていると思うのですね。」「戦術核と言うのは安上がりだが、戦略核あつての戦術核だ。なぜなら拳銃を出してそれが戦術核の兵器であつたならば、向こうがすぐ戦略核を出してきた場合、たちまちこつちはやられちゃうのです。しかも戦術核は戦略核を誘発する危険を常に持つてゐるわけですね。」(『決定版三島由紀夫全集』第40巻 p.285 ～ 287)

このあとに『文化防衛論』での議論を簡略にまとめたような次の議論が続く。

「大統領は権力であり、日本の総理大臣は権力であります。天皇とはなんであるか。天皇は権力じゃないのです。天皇はつまり何者も拒絶しないのだから権力じゃないというのが、私の基本的な考え方であります。(略)ところが天皇というのはすべてを映すリフレクションというような機能であつて、権力が機能ではない。文化というものは多様性と自立性ということなしには一刻もありえないものですから、その文化の多様性と自立性というものはす

べて天皇の鏡にそのまま包含されるような形で許されるのですね。」(p.288～289)

また、評論家の小汀利恵との対談「天に代わりて」では次のように語っている。

「これはまことに福田（赳夫）自民党幹事長なんかにも話したんです。ですが、こういう世の中には、どうも核が原因じゃないかと思えるんです。というのは、国家権力でも何でも、権力というのは力ですから、「ライコール兵器」で、兵隊の数と強い兵器を持っているほうが強い。いままでは兵器が使えるからこそ強かつたんです。ところが使えない兵器を作っちゃったんですね。広島で使って、あんな惨禍を起こして使えなくしてしまった。使えない兵器というのは、あるいは力というのは恫喝にしか用をなさない。恫喝ないしは心理的恐怖、ひとつシンボリックな意味だけが強まってきた。そうなると、片一方のほうは、使えぬ兵器に対するものとして人民戦争理論みたいに、ずっと下の方からしみこんでくるやつが出てくるのは当然ですね。それを見て被害者意識といつのがだんだん勝つ力になってくる。」(天に代わりて) (初出『論人』1968年7月)

こうした発想は、『文化防衛論』でも流説した「世界的に被害者と加害者の逆転」が起こっているという認識につながっている。三島は、核抑止力を「シンボリック」なものとしてとらえ、それが現実での力の行使を抑え、核の力のシンボル化と「人民戦線」(これを「被害者意識」による「連帶」)を誘発するものだと考える)とを対応したものとらえている。また左翼運動での行動のシンボリックな意味合いについては映像の問題とも絡め、大島

渚との対談で扱っている。大島渚との対談「ファシストか革命家か」(初出『映画芸術』1968.1 その後『源泉の感情』1970.10に所収)

『決定版三島由紀夫全集』第39巻)において、全学連の政治行為を、マスコミを意識した後世へのアリバイ作り、つまり「象徴行為」(これは政治行為が実在の制度—三島言うところの「ファクト」—との接続を失い表象でしかなくなつたことを意味する)でしかないと批判している。そしてすべての政治行為が「象徴行為」、いわば「文化的なもの」でしかなくなり、また最大の力である核兵器が最強の超越性であるがゆえに逆に使用できなくなり、権力がそのままでは機能しなくなつた状況下において『文化防衛論』の主張、すべてを文化的に包括し、なおかつテロリズムですら是認する)とされる「文化的概念としての天皇」概念が出てくるのである。

「このような文化概念としての天皇制は、文化の全体性の二要素を充たし、時間的連続性が祭祀につながると共に、空間的連続性は時には政治的無秩序をさえ容認するに至ることは、あたかも最深のエロティシズムが、一方では古来の神權政治に、他方ではアナキズムに接着するのと照應してゐる。「みやび」は、宮廷の文化的精華であり、それへのあこがれであつたが、非常のときには、「みやび」はテロリズムの形態をさへとつた。すなはち、文化概念としての天皇は、国家権力と秩序の側だけにあるのみではなく、無秩序の側へも手をさしのべてゐたのである。」(『文化防衛論』『決定版三島由紀夫全集』第35巻 p.46～47)

「このやうなターニング・ポイントは、實はヴィエトナム戦争によつて長期間に養成されたものであつた。すなはち、ヴィエトナム戦争への感傷的人道主義的同情は、民族主義のインターナン

ヨナリズムの癒着を無意識のうちに釀成し、反政府的感情とこれが結合して、一つの類推を完成させた。類推とは、他民族に自立感情に對する感情移入を以て、自民族の自立感情のフ拉斯トレーションの解決をはかるといふ代償行為である。「エンスター・プライズの寄港と全學連の基地侵入といふ一連の象徴的行為は、「見る者」としての民族主義に、「見られる者」となつた危機感と満足感を齎した」(『決定版三島由紀夫全集』第35巻 p.33~34)。

こうした状況を「ポスト・ヴィエトナムの時代」と評した三島は、「ポスト・ヴィエトナムの時代」の時代には、「民族主義」の言説上での意味付けの違い(19)「ヘゲモニー」争いがある種の極点に達する、つまり「論理的な継ぎ目をぼかしながら育成され、最後に分離の様相を明らかに」することで、民族問題は「金嬉老事件」に象徴される「人質にされた日本人」「抑圧されて激發する異民族」「日本人を平和的にしか救出できない國家権力」(p.36)という三つの主題を持ち、日本は国際的な文脈でそれらを自在に中身を取り替えながら使い分けるようになっていくであろうとする(19)。

7 「概観的な時代」の「終末観」と「民族的憤激」は表象可能か —三島の表象批判とその陥穽—

三島の原爆表象は、それが与えた世界認識を終末観としてみると、点では一貫しており、さらに、そうした世界認識が自分の文学觀にも否応なく刻印されていることを認めている。しかしそれが文學の中に回収されない否定的な性質を持つことを明確に自覺して、いた三島は、肯定的な形では表象しようとしている。『美しい星』

ではいわば山崎の言う「二重化されたナラティヴ」で表象することとで(20)、その点の処理を行つていて。こうした決して肯定的には表象できないもの、例えば資本主義の運動を、晩年三島は唯識論の独自の解釈に依拠することによって、「世界解釈としての小説」の中に埋め込み、『豊饒の海』を書いた(21)。三島はいわば高度資本主義時代でありかつ核戦争の時代における小説の表象の問題を、独自の理論で考察し、そのための戦略を練り上げて作品化していたのだといえるだろう。

では、そのような処理は結局のところ、うまく行つていているのだろうか。

「表象不可能なものを表象」しようとする三島の戦略には、実のところ、いくつかの陥穽がある。先に拙稿で述べたように(22)、三島は表象不可能性を单一の「すべては表象不可能だ」というメタレベルの命令として処理している。そこでは重層的な社会的諸関係が安易に「表象の危機」の名のもとに、表象不可能性という单一の「空間」に還元する処理が行われているのである。「概括的概観的なメカニックな世界認識」「ある人間が頭の中で、地球儀のような、一望の下に見渡せる図式的な世界像を即座に描き出せる」という理解はそうした還元を呼び込んでしまう。

先に、「超越性の審級が敗戦を境に三種の神器が表象する天皇から原爆が表象する「神秘的な超越性」へと「転移」したと述べているが、三島においてはこの両者が癒着している」と書いたが、この癒着を三島は実のところ、処理できていない。内田が詳述するように、この超越性の転移を処理するために、柳田國男や折口信夫は「神」「家族」の審級の練り直しを行つた(23)のだが、三島

は核兵器によつてもたらされた「概括的概観的なメカニックな世界認識」をそのまま自らの天皇概念である「すべてを映すリフレクション」というような機能に接木してしまつてゐる。

「三島は戦後の『言論の自由』の重要性を認め、『文化防衛論』や橋川文三との対話の中でもその点を強調している。

「しかし私が、天皇なる伝統のエッセンスを衍用しつつ、文化的の空間的連続性をその全体性の一要件としてかかげて、その内容を「言論の自由」だと規定したたぐらみに御留意ねがひたい。なぜなら、私はここで故意にアナクロニズムを犯してゐるからです。過去二千年に一度も実現されなかつたほどの民主主義日本の「言論の自由」といふ、このもつとも先端的な現象から、これに耐へて存立してゐる天皇といふものを逆証明し、そればかりでなく、言下の言論の自由が悪起してゐる無秩序を、むしろ天皇の本質として逆規定しようとしてゐるのです。かういふ現象は実は一度も起きなかつたことですから、私の証明方法は非歴史的であるひは超歴史的といへるでせう。」（『橋川文三氏への公開状』（初出『中央公論』1968・10『決定版三島由紀夫全集』第35巻 p.207）

この認識が「すべてを映すリフレクション」「文化」というものは多様性と自立性ということなしには「一刻もありえない」という言い方につながつてゐるのである。しかし、そのたとえ無秩序ですら許容し、すべてを映す「鏡のような天皇」とは、「ある人間が頭の中で、地球儀のような、一望の下に見渡せる図式的な世界像を即座に描き出せるといふこと、どんな凡庸な人間にもそれが可能」であるという価値観とどこで弁別されるのだろうか。このふたつの価値観を弁別するには、「概括的概観的なメカニ

ックな世界認識」がいやおうなく持つインター・ナショナリズムと天皇概念が持つナショナリズムとを弁別する—「日本文化」の導入一か、あるいは天皇概念とそれに接続する人間との間に、超越性の差異を導入するしかない。だが、それは「すべてを映し出す」という規定と明白に食い違い（すべてを映し出すということは「しかし、何でも受け入れるがゆえに、もつとも醜悪なもの、もつとも傷つけるものがすべてがそこに投下されてくる、そういう場」⁽²⁴⁾）ということである）、さらに核の超越性と天皇の超越性のどちらが上位に立つのかを不間に付す（同質だとすればそれは交換可能だということになり、差異も超越性の規定自体もできなくなる）ことによつて成立する。これは被害者としての原爆体験を自らのイメージ能力の外側にあるとして放擲（サバルタンは語ることができない）しながら、「民族的憤激」についてはそれを「思ひ起」こすことができない、「一つまりイメージ化できる」とする矛盾した姿勢にもつながる。さらにそれを元に新たな「新しい政治的論理」（つまり核武装）を形成しようというのは、表象＝代表批判以前への単なる退行であろう。

さらには、三島が大島渚との対話で問題化し、『文化防衛論』で述べるベトナム報道やエンタープライズ入港における「見るもの」「見られるもの」の関係には、いうまでもなく（視線）にメディアを媒介にした想像力が介在している。これが「交通通信の発達による世界像の最終的拡大は、つひに地球の表面積と正確に一致した現在のメディア状況によるものであることは明らかであり、だからこそ、「テレビがファシズムとどのように折り合うか」を三島は大島との対話で鋭く問題化できた⁽²⁵⁾のだが、それを

たとえば、「もつとも先端的な現象から、これに耐へて存立してゐる天皇といふものを逆証明し、そればかりか、言下の言論の自由が應起してゐる無秩序を、むしろ天皇の本質として逆規定しようととして」いこうとする三島の証明方法は、一種の遠近法の倒錯であり、問題を處理しないまま、安易に單一の空間の表象＝鏡としての天皇に預けてしまつたといふことになる。それは結局三島

が「今日の小説の問題」を「現代の終末觀を投影」することで處理した結果、「すべての具体性を死に絶え」させてしまつたことを意味する。

（社会的諸関係の中に織り込まれた被害者とも加害者ともつかない）さまざまの情動をどのように表象するか、そして現代の社会構造の中でそれをどのように組織化するか」という現在のすべての文化批評・社会理論が直面する問い⁽²⁶⁾に、この三島の表象批判とその処理の戦略は最終的に答えることができないのである。

（2007・11・20 於 台湾）

- (1) **注**
鈴城雅文はその犀利な『原爆＝写真論』（窓社 2005）の冒頭で、この投下者と被投下者の非対称性の問題に触れている。p 14～16。
ただ、鈴城の分析の焦点は「投下者」ではなく「被投下者の一人」であるカメラマンのファインダーが写し取つてしまつた『原爆＝写真』それ自体の「得体の知れなさ」「特権者のまなざしへの（否）」にこそある。
- (2) 西谷修は『夜の鼓動に触れる 戰争論講義』（東京大学出版会

1995）で、被爆者の状況を「人間的意味」には回収されないと述べている。

この点について、注8の山崎論文が詳しく検討を加えている。

- (3) 1995) で、被爆者の状況を「人間的意味」には回収されないと述べている。
- (4) 三浦雅士「距離の変容」（『メラノコリーの水脈』福武文庫 1989）。
- (5) 矢吹省二「ある悲劇の分析—三島由紀夫『美しい星』考—」（『国学院大学紀要』27号 1989・3）。
- (6) 及川俊哉「三島由紀夫『美しい星』論—物語類型における聖書との関連について—」（『言文』47 2000・1）、同「『美しい星』読解の仮案—破綻の証明とその積極的評価—」（『言文』48 2001・1）。
- (7) 山崎義光「山崎義光『二重化のナラティヴ—三島由紀夫『美しい星』』と一九六〇年代の状況論—」『昭和文学研究』43 2001・9。
- (8) 有元伸子「『美しい星』論—二重透視の美学—」（『金城学院大学論集（国文学編）』33号 1991・3）。
- (9) 山崎義光「二重化のナラティヴ—三島由紀夫『美しい星』と一九六〇年代の状況論—」（『昭和文学研究』43 2001・9 p.97）。
- (10) 大島渚との対談「ファシストか革命家か」（『決定版三島由紀夫全集』第39巻）。ここで中村の『日本ファシズム論』を理論的な体系がないから不十分だが、細かなデーティで丸山の議論を「ぶつこわしている」として一定の評価を与えていた。なお、三島は「日本には丸山の言うようなファシズムは存在しない」という立場をとる。
- (11) 『決定版三島由紀夫全集』第34巻 p.448。
- (12) 「私の中のヒロシマ」（『決定版三島由紀夫全集』第34巻 p.448）。
- (13) この観点は原爆文学研究者の川口隆行氏との対話に示唆を得ている」とをお断りしておく。
- (14) これらの資料の存在は川口隆行氏より示唆を受けた。なお、川口

(20) 氏によればこのようないい言説は「レスコート」の解禁と関連があるといふ。また原爆恩寵論の言説の創始者であり、「天皇主義者」(川口隆行)でもあった永井隆の存在も忘れてはなるまい。永井については、『永井隆全集』全3巻(サンパウロ出版 2003)のほか、川口隆行『原爆文学という問題領域』(創元社 2008 近刊)第4章「被害と加害のディスクール」、戦後日本と「わたしたち」—「敍説」19「原爆の表象」所収の諸論文、山田かん「インタビューカー記憶の固執—山田かん氏に聞く」、長野秀樹「原爆は「神の摂理」か」、花田俊典「原爆の再問題化のために—アウン・シュヴィッツ・シベリア、そしてヒロシマ・ナガサキ」、さらに拙稿「原爆文学研究への一補助線—表象不可能性とイメージをめぐるノートーー」『原爆文学研究4』(花書院 2005)を参照。

(19) 内田隆三「國土論」第1部第3章「焦土」(筑摩書房 2002)。

(18) 拙稿「恥辱・受動性・集団の橋—情動と集合性をめぐるノートーー」(『三重大日本語学文学』第18号 2007・6)。

(17) 拙稿「恥辱・受動性・集団の橋—情動と集合性をめぐるノートーー」(『三重大日本語学文学』第18号 2007・6)。

(16)(15) 1—1—「革命哲学としての陽明学」(初出 1970・9 『諸君!』)「決定版三島由紀夫全集」第36巻)。

(15) この部分の分析は拙稿「『言論の自由』と「文化的天皇」—「文化防衛論」における「表現」と「倫理」の問題ーー」『三島由紀夫論集 II 三島由紀夫の表現』勉誠出版 2001・3)と重複している。

(14) なお、及川は注⁵であげた論『美しい星』読解の仮案—破綻の証明とその積極的評価ーー」(『言文』48 2001・1)で、『美しい星』はその結末部が解釈できず、明らかに「破綻」しているが、その「破

(21) 總」は、「核による滅亡」という「原理的に物語化しえぬ主題」（p. 56）を表象しようとしたことによるものだとして、これに積極的な意味を見出している。この及川の指摘は、『美しい星』論の文脈を超えて重要である。というのは、この「破綻」は三島の長編小説全体について言いうる可能性－作品の構成上の欠陥というより三島が半ば無意識に反復していた構造的「破綻」－があるからである。『仮面の告白』が前半と後半でずれをきたしていることは発表当時から指摘されていることであり、『金閣寺』の溝口の「生きよう」という決意がそれまで作品の語りからはみちび出せないこと、また『鏡子の家』の「犬とともに帰還する夫」があまりにも唐突であることなど、三島の多くの長編小説は、「執拗にこの破綻自体を反復している」ようにもとれるからである。また『絹と明察』『天人五衰』の結末も、私がかつて試みたように（拙稿『絹と明察』・『月澹荘綺譚』・『天人五衰』・『認識を越えるものの表象について』『近代文学試論』第三十四号 1996・12）他作品と関連付けて意味づければそれなりの解釈は可能であるものの、やはり唐突な結末という印象は否めない。この破綻の反復が、三島の終末観の認識、および三島の作品でこれまた執拗に反復される「記憶をつかさどる力」の表象（この点については拙稿『記憶する男』・記憶をつかさどる女・記憶の絶滅－三島由紀夫の「記憶の編成」－）『日本近代文学』第62集 2000・5を参照）とどのように組み合わさっているのかについては本稿のこの不十分な結論だけではなく、また別の形で総合的な議論を行わなければならぬ。

(22) 2000・5および『暁の寺』論 芸術＝救済の否定」(『三重大日本語学文学』第十号 1999・6) を参照。また有元論文、及川論文にも『美しい星』と『豊饒の海』の類似性について指摘がある。

(23) (22)拙稿「記憶する男 記憶をつかさどる女 記憶の絶滅——三島由紀夫の『記憶の編成』——」『日本近代文学』第62集 2000・5および『暁の寺』論 芸術＝救済の否定」(『三重大日本語学文学』第十号 1999・6)。

(24) (23) 内田隆三『國士論』第2部第1章「生の哲学」(筑摩書房 2002)。柳田においては「常民」概念と「家」の再組織化によって、そして柳田を批判した折口においては普遍的な世界宗教としての日本の「神」の構想によってである。なお内田の三島論には『國士論』第2部第3章「憂国」があるが、原爆については言及はない。

(25) (24) 福田哲・長原豊『遺産相続』『現代思想 緊急特集 ジャンク・デリダ』(2004・12)。

(26) (25) 「ファシストか革命家か」(『決定版三島由紀夫全集』第39巻)。な

お大島が60年代に行つた喪の作業とサバルタンの表象について四方田犬彦「映画における哀悼的想起」大島渚・パゾリーニ・ファスビンダー「映画と表象不可能性」(産業図書 2003) が示唆的である。

(26) (26)この点については、筆者の現在進行中の2つの作業を参照されたい。「トロリズム・ナショナリズム・ポストコロニアル(Ⅰ)——9・11以後の文化批評理論の陥落と課題——」『日本学と台湾学』(静宜大学外語学院日本語文学系紀要) 4号 2005・9、「トロリズム・ナショナリズム・ポストコロニアリズム(Ⅱ)——文化批評と社会理論の臨界——」『日本学と台湾学』5号 2006・9、「原爆文学研究への一補助線——表象不可能性とイマージュをめぐるノーメー——」『原爆文学研究』4 2005・9、「複数・可塑性・倫理——表象不可能性とイマージュをめぐるノーメー——』『problématique』7 2006・10、「恥辱・受動性・集団の橋——情動と集合性をめぐるノーメー——」(『三重大日本語学文学』第18号 2007・6)。